

Alphonse Mucha Museum News

堺 アルフォンス・ミュシャ館 (堺市立文化館)



アルフォンス・ミュシャ
《モナコ・モンテカルロ》
1897年
リトグラフ、紙

Contents

展示報告 (2020年3月—2021年3月)
作品紹介
イベントレポート
ミュシャ館インフォメーション
主な作品修復報告
学芸員コラム

vol. 10

華やかなポスターや装飾パネルが有名なミュシャですが、実は女優サラ・ベルナルに見いだされ有名になる前は挿絵画家として活動していました。しかし、その活動を画業初期から晩年まで続けていたことはあまり知られていません。初期の傑作としてあげられる書籍『白い象の伝説』の挿絵は繊細で精緻な描写に特徴を見ることができます。当館では下絵を多数所蔵しており、本展ではそれらを一堂に展示しました。ミュシャはデザイナーとして人気となってからも変わらず表紙や挿絵を手掛け、『トリポリの姫君イルゼ』では彼の円熟した装飾デザインが全ページにわたって施されています。本展では、ミュシャがライフワーク的に手掛けていた初期から晩年までの本の表紙や挿絵を通して物語の世界とミュシャの新たな一面をご紹介します。

第1章では、ミュシャの作品や雑誌『明星』のレプリカを通じて日本の書籍へのミュシャの影響についてご紹介しました。ミュシャはすでに明治期の日本において書籍や雑誌の挿絵、そして装丁にも影響を与え、その名が日本人に知られていました。日本にアール・ヌーヴォーのデザインを紹介した洋画家の浅井忠は1900年のパリ万国博覧会を機に渡仏し、残された写真からはパリで暮らしていたアパートの室内にミュシャのポスターが貼られていた様子が窺えます。黒田清輝も同様に留学し、帰国後の白馬会展では第5回展と第6回展にミュシャのポスターが展示されています。一方、白馬会の画家も多く参加した雑誌『明星』ではミュシャを思わせる女性像が表紙を飾り、ミュシャは「ムツカ氏」という名前で誌面に紹介されています。ミュシャは日本人の画家が描いた『明星』の挿絵をとおして広く日本にもたらされたのです。

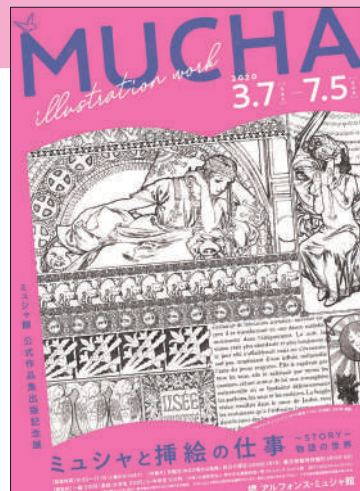
第2章では、当館が所蔵する書籍『白い象の伝説』挿絵の下絵の数々を中心に、ミュシャがパリで挿絵画家として活躍した時期の作品をご紹介します。パリでの画業初期、ミュシャは挿絵画



アルフォンス・ミュシャ
書籍『白い象の伝説』(第3章)挿絵<下絵>
1893年 墨、水彩、紙

家としての仕事を中心に活動していました。なかでもミュシャが表紙と挿絵を手掛けた『白い象の伝説』は繊細な描写が特徴的です。さらに『ドイツ史と諸場面のエピソード』の挿絵を手掛けたことにより、ミュシャは挿絵画家として評価されています。現在まで続く大手出版のアルマン・コラン社からこれらを依頼されたのも、もともと挿絵画家として一定の評価をされていたからでしょう。そして演劇ポスター『ジスモンダ』を発表し、デザイナーとして目ざましい活躍をするミュシャは『トリポリの姫君イルゼ』に見られる美しい装飾によって変わらず物語を彩ります。本展では、見事な装飾が施された本作の全ページをパネルでご紹介しました。

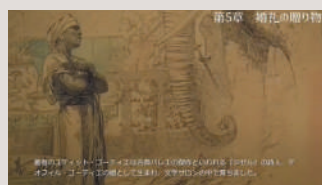
第3章では、チェコ時代の挿絵作品を中心にご紹介しました。1910年を境にミュシャは活動の拠点をチェコに移します。それは、これまでのパリでのデザイナーとしての活動に区切りをつけ、祖国への芸術的貢献を果たすため新たな創作活動へと向かうミュシャの決意でした。作品にも変化が表れます。本格的な油彩画が増えていくほか、独立した新政府のために無償で紙幣や切手をデザインするなど祖国とスラヴ民族の発展を願った仕事を多く引き受けるようになるのです。それでも、変わらず手掛けているのは書籍と雑誌の表紙や挿絵の仕事でした。この頃からチェコの伝統的な衣装に身を包んだ女性がより多く表紙を飾るようになりました。(N.N.)



動画配信サービス開始!

新型コロナウイルス感染症の拡大防止を目的として、当館は2020年3月2日(月)～5月15日(金)の間、臨時休館致しました。この期間、当館ではミュシャファンの皆さまに、お家でミュシャを楽しんで頂こうと、当館の企画展や所蔵作品を紹介する動画シリーズ「おこもり美術館」を公開しました。本シリーズでは、当初3月より開催予定であった企画展「ミュシャ館 公式作品集出版記念展 ミュシャと挿絵の仕事～STORY～物語の世界」の展示の様子を、各章ごと全4回に分けて見どころを放映しました。

作品解説のナレーションと共に、ミュシャの精緻な筆致をカメラで拡大した画像でお届けするなど、見どころ作品を中心にご紹介しました。しっとり流れるBGMを背景に、いつもの展示室とは違う鑑賞体験を多くの皆様にお届けしました。



YouTube「ミュシャ館チャンネル」では、今後も企画展や当館所蔵コレクションの魅力など、館情報を発信していく予定です。ぜひ一度ご覧ください。



アルフォンス・ミュシャ 創作の軌跡

2020年7月11日(土) ▶ 11月8日(日)

アルフォンス・ミュシャの生誕160年を記念し、堺市が所蔵する主要なミュシャコレクションを一堂に公開しました。堺市はミュシャの画業初期から晩年まで、生涯に渡るコレクションを所蔵しています。これらはミュシャを一躍パリで有名にしたポスターやパネルはもとより、大型油彩作品、彫刻、宝飾品、素描、書籍の挿絵など、世界でも有数の体系的コレクションです。本展では、パリ時代のアール・ヌーヴォーを代表するミュシャの優雅な女性像のポスターやパネル、また転機となった1900年パリ万国博覧会に関連する作品、そして後年祖国チェコの独立と平和を願って創られた作品など、ミュシャの初期から晩年までの創作の軌跡を、堺市が世界に誇るミュシャコレクションによって、余すところなくご紹介しました。

幼い頃から絵を描くことが好きだったミュシャ。第1章では、ウィーンやチェコ、ミュンヘン、パリ、とヨーロッパ各地を転々としながら、舞台装置を作る工房への就職、肖像画を描く仕事、城の室内装飾、そして教会のための絵画制作など、美術に関わる多様な仕事を経験したミュシャの修行時代を振り返りながら、主にミュシャ 20代の修行時代のデッサンをご紹介しました。また1889年以降、パリで雑誌や書籍の挿絵画家としてサロンで受賞し、着実に成果をあげていった30代前半の挿絵作品もご覧いただきました。

1894年、34歳の時、挿絵画家として実績を積んでいたミュシャに転機が訪れます。大女優サラ・ベルナルの演劇ポスターを依頼されたのです。ミュシャにとっては初めてのポスター制作でしたが、1895年の年明けに等身大のポスター《ジスモンダ》がパリの街中に貼りだされると、たちまち評判になりました。ミュシャのデザインを大変気に入ったベルナルはミュシャと専属契約を結び、演劇ポスターや舞台制作、ジュエリーデザインを依頼しました。

第2章では、サラ・ベルナルのポスターをきっかけに、売れっ子デザイナーになったミュシャが、お菓子やお酒、香水、タバコの巻紙、自転車などの商品、また旅行や展覧会といったサービスやイベント、会社や組織のための宣伝に至るまで、デザインした様々なポスターをご紹介しました。魅力的な女性が登場するミュシャのデザインは人気を博し、ミュシャのデザインは文字が印刷されていない装飾パネルという鑑賞用のポスターとしても採用されました。

第3章では、デザイナーとして有名になっていたミュシャがベル・エポックのパリを華やかに彩った1900年のパリ万国博覧会で手がけた作品をご紹介しました。それらはブロンズ彫刻《ラ・ナチュール》の制作、宝飾品や室内装飾品、パピリオンのデザインなど多岐にわたります。なかでもボスニア・ヘルツェゴヴィナ館の壁画装飾は、晩年の大作《スラヴ叙事詩》を描ききっかけの1つとなり、その後のミュシャの人生に大きな影響を与えました。この時期のミュシャは、『装飾資料集』のような、これまでのデザイナーとしての自身の成果を結集した仕事の一方で、パリに来てからはほとんど描いていなかった油彩作品を再び描くようにもなります。またこれまで主要であった商業的な作品から、『主の祈り』のような自発的な作品も描くようになり、さらに彫刻を制作するなど、ミュシャにとってこれまでにない芸術上の挑戦、そしてミュシャ自身が望む仕事を数多く行うようになりました。

1900年、40歳頃からは自身のルーツであるスラヴ民族の壮大な歴史を描いた巨大な20連作《スラヴ叙事詩》の構想を始めました。本作を実現する資金集めのために、1904年以降ミュシャはたびたびアメリカに渡り、1909年に資金援助者を見つけ、ついに翌年50歳で本作を制作するために祖国チェコへと戻りました。第4章では、ミュシャが《スラヴ叙事詩》以外にも祖国のために行った多くの仕事をご紹介しました。プラハ市民会館の市長の間の装飾、そして公共の催し物、被災者の救済を求める復興支援ポスターなど、パリ時代の商業的な仕事とは異なる、チェコとスラヴ民族のための作品です。また1918年チェコスロヴァキアがオーストリアから独立した時、ミュシャは新政府のために切手や紙幣、警官の制服のデザインを無償で引き受けました。約16年をかけて《スラヴ叙事詩》を完成させたミュシャは、1939年に79歳で亡くなるまで、スラヴ民族や人類の平和と進歩を願って作品を描き続けました。(Y.K.)



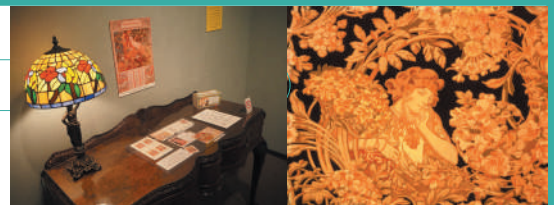
テーマ展示

生活を彩るミュシャ

ミュシャ生誕160年記念展に合わせて3階展示室では、ミュシャがあゆんだ創作の軌跡の中から、生活の中にとけこんだミュシャの作品をご紹介しました。

ベル・エポックのパリでは、市民革命や産業革命による社会構造の変化でブルジョアジーと呼ばれる中産階級が台頭し、文化芸術も上流階級だけのものから広く開放されます。アール・ヌーヴォー様式が建築や家具、工芸など装飾芸術の分野で発展した背景には、ブルジョアジーの私的な空間を飾る機運の高まりがありました。また、ポスターや新聞、雑誌の挿絵など、印刷技術が発達した当時のフランスでは、カレンダーや絵葉書、メニューなどにも華やかな装飾や絵（イラスト）がかかせないものになっていました。このような時代背景も相まって、流麗なミュシャの作品はますます人気を博し、ポスターだけでなく、室内鑑賞用の装飾パネルをはじめ、絵葉書や便箋、カレンダーなど、より身近な日用品にも応用されるようになります。

今回の展示では、アール・ヌーヴォーが人々に広く受容されていた時代の様子を展示空間全体で感じていただきたく、実用品と芸術が結び付いたミュシャ作品とアール・ヌーヴォー様式の調度品や室内装飾を合わせて展示空間を設えました。晩餐会の案内状、壁を彩るテキスタイル、装飾タイル、リビングのテーブルにはメニュー表と壁面には室内鑑賞用の装飾パネル、食器やカトラリーデザイン、個室の机には書きかけの絵葉書と、お菓子のパッケージなど、日常のちょっとした楽しみとしてもミュシャのグラフィックデザインが広く大衆に歓迎されていたことがわかります。(Y.H.)



▲ビザンティン壁布
▼晩餐会のメニュー



ミュシャとアメリカ

2020年11月14日(土) ▶ 2021年3月21日(日)

アルフォンス・ミュシャは50歳の時から約16年かけてスラヴ民族の歴史大連作《スラヴ叙事詩》を制作し、祖国チェコの独立と平和に芸術で貢献しました。本作を実現するために、ミュシャは1904年以降たびたび渡米します。そして1909年に制作のための資金援助をアメリカで取り付け、1910年にチェコに戻って制作を開始しました。本展はこの大作を成し遂げるために欠かせなかったミュシャとアメリカをテーマに取り上げました。

第1章ではミュシャがパリで名を揚げ、渡米のきっかけとなった、サラ・ベルナルにに関連する作品を中心にご紹介しました。ミュシャは幼い頃から絵を描くことに親しみ、学生時代から画家を目指していました。ミュンヘンやパリの美術学校でデッサンなどの美術の基礎を学び、肖像画や舞台装置の制作、また城の室内装飾など、30代半ばまでに、芸術に関わる多様な経験を積みながら、自身の画家としての将来の方向性を探っていました。そして女優サラ・ベルナルの舞台ポスターの注文が転機となり、その後ミュシャにはベルナルのための仕事をはじめ、商業ポスターなどの様々なデザインの仕事が舞い込み、デザイナーとしての地位を不動のものとしていきました。ミュシャが渡米する前に、アメリカ公演を成功させていたベルナルは、《スラヴ叙事詩》制作の資金収集を計画していたミュシャに、彼女の友人ロスチャイルド男爵夫人と共に渡米を勧めたとされています。ベルナルとミュシャの出会いは、ミュシャのデザイナーとしての成功にとどまらず、彼の画家人生に大きく影響を与えたと言えるでしょう。

第2章では《スラヴ叙事詩》とその資金集めのための渡米のきっかけの1つとなったパリ万博に関わるミュシャの作品をご覧頂きました。美術学校に通っていた学生時代のミュシャは、歴史画の大家から学び、自身も歴史的なテーマを油彩で描く歴史画家を目指していました。しかしパリでデザイナーとして成功して以来、多くの注文が舞い込み、ポスターや装飾パネルといった商業的デザインの仕事に忙殺され、多忙な日々を送っていました。デザイナーとして有名になっていたミュシャには、1900年のパリ万国博覧会でボスニア・ヘルツェゴヴィナ館の壁画制作の依頼が舞い込みます。ミュシャは本作の制作を通じて、祖国チェコと同様にオースト

リア＝ハンガリー帝国の統治下でスラヴ民族が住むボスニア・ヘルツェゴヴィナに赴きました。ここでミュシャは残りの人生をスラヴ民族自決のために働くことを誓い、《スラヴ叙事詩》を構想し始めます。そしてミュシャはそれまで約10年間も描いてこなかった油彩画を再び手掛けるようになり、歴史や人類といった壮大なテーマの作品を描き始めます。

第3章ではミュシャがアメリカ滞在中に描いた作品、また滞在中に得た人脈を通じて描いた作品などを中心にご紹介しました。1904年に初めてアメリカに渡ったミュシャ。アメリカの新聞は「世界最高の装飾芸術家」として、ミュシャの到着を大々的に報じ、現地の社交界やクラブでは連日宴会が催され、大歓迎を受けました。その背景には、サラ・ベルナルがアメリカ公演でミュシャがデザインした演劇ポスターを使っていたことが挙げられます。ミュシャはアール・ヌーヴォーの中心人物として、既に知られていた存在となっていました。アメリカでのミュシャは、社交界の女性の肖像画を描き、美術学校でデザインの授業を行い、またポスターや演劇関連の仕事、雑誌の表紙を手掛けるなど、幅広い活動を行いました。中でも後に《ハーモニー》を生んだドイツ劇場の装飾の仕事は、ミュシャのアメリカ滞在における最も大規模な仕事でした。アメリカ滞在は、人脈作りという面でも重要でした。《スラヴ叙事詩》の制作資金の援助者チャールズ・クレインと出会い、また彼を通じて後年チェコスロヴァキアの初代大統領となるトマーシュ・ガリグ・マサリクとも知り合います。

晩年の大作《スラヴ叙事詩》はミュシャの画家としての一大事業でした。本展では本作を成し遂げるために欠かせなかったミュシャのアメリカ行きを取り上げ、渡米に至るまでの過程やアメリカでの活動をご紹介し、ミュシャの志を持った芸術家としての一面を垣間見る機会となりました。(Y.K.)



テーマ展示

ミュシャの教室

3階展示室では「ミュシャとアメリカ」展の開催に合わせて、ミュシャの渡米中の重要な仕事のひとつであった「美術教師」としての顔に注目し、教育に関連する作品を紹介するテーマ展示を行いました。パリでの挿絵画家時代、ミュシャの小さなアトリエにかつてのクラスメイトたちがデッサンや構図を教えてもらいにやって来たことから始まった「ミュシャ講座」は、次第に大きくなり、やがては母校である私立画塾アカデミー・コロロッシの教壇に立つようになります。本展では、その頃に制作された生徒募集のリーフレットやポスター、さらにはミュシャが手掛けた「教科書」とも言えるデザイン・アイデア集『装飾資料集』『装飾人物集』等、約30点の作品を紹介しました。教育というテーマで自ずと多く集まったのは、ペンを持つ女性像です。その真剣でまっすぐな眼差しは、優雅なミュシャのビーナス像とはまた異なる知的な魅力を秘めています。

さらに作品の合間には教師としてのミュシャが遺した言葉をパネル展示することで、その教えの中身にも触れました。言葉の中には構図の法則や目のメカニズムを説明するものが多く、ミュシャの理論派としての側面を知ることができます。「私が教えられるのは法則や技法だけであって芸術を教えることができない」と述べたミュシャは、芸術というものは民族的な生活の表現であるべきと考えており、アメリカ人含む多くの外国人に「技法」を授けました。国立アカデミーへの入学が難しい外国人や女性が美術を学ぶ場として発展したパリの私塾であるアカデミー・コロロッシやアカデミー・ジュリアンには、黒田清輝や久米桂一郎等、日本人画家の姿も多くありました。ミュシャが直接教えた生徒の中には、画家・鹿子木孟郎がいたことが分かっています。このように、デザイナー・画家として知られるミュシャを美術教師という側面から注目すると、新たな一面や興味深い事実が浮かび上がってきました。(M.T.)

アトリエで教えるミュシャ
「ラ・ブリュム誌」より 1897-98年



《モナコ・モンテ=カルロ》

1897年 リトグラフ、紙 1090×706mm
●企画展「アルフォンス・ミュシャ 創作の軌跡」に出品

髪につけた鮮やかな赤い花がひときわ目を引く少女が、アジサイやライラック、スミレとおぼしき花々の環、そして蔓のアーチの華やかな装飾を背に、はるか彼方を見上げている。彼女を円く囲む花の環の、葉の部分は下から上に向かって、少しずつ鳥の姿に変化しており（**拡大図**）、まるで風車のようにくるくると回る花の環から鳥たちが飛び立っていくようだ。さらに奥には、青い海と山々に囲まれた海岸沿いの街が描かれている。画面には明るく開放的で華やかな雰囲気がいっぱい溢れている。

本作はパリ、リヨン、地中海地方を結ぶ鉄道会社(P.L.M.)の宣伝ポスターである。ポスターは地中海に面したリゾート地、モナコのモンテ・カルロへの旅へと誘っている。画面下部には鉄道のチケット、そして16時間の豪華列車で行く旅情報が広報されている。画面奥には、山と海に囲まれた旅の目的地であるモンテ・カルロの街が描かれていることが推測できる。回転し、動いているようにも見える花の環や、上方へとカーブを描いて伸びる植物の蔓は、汽車の車輪や鉄道のレールを思い起こさせる。19世紀後半のフランスでは、鉄道網の発達により観光旅行がブームになった。ミュシャは、太陽が降り注ぎ、花々が咲き乱れる温かいモナコへの心躍らせる旅の期待感、少女のうっとりとした憧れの眼差し、花々や美しい景色によって華やかに表現している。(Y.K.)



《通りすぎる風が若さを奪い去る》

1899年 リトグラフ、紙 277×184mm
●テーマ展示「生活を彩るミュシャ」、企画展「ミュシャとアメリカ」に出品

二日月型の枠いっぱい
にゆったりとした姿勢でこちらと風の行方に目を向ける二人の人物。二人の手もとから風が吹き流れ、髪がなびき、花はそよぎ、花びらは舞い、ドレープの裾が翻っている。下部はガラスのような繊細な質感が感じられる有機的な曲線が絡んでいる。人物のポーズは静的ながら作品全体は動的な印象をもたらしている。



本来このデザインは、ミュシャも構想に携わっていた1900年のパリ万博のバビリオン“人類館”に使われるためのものであったとされている。残念ながらこの人類館は実現せず幻となってしまったが、建物の三日月形のファサード用に描いていたものを扇のデザインとして転用したようである。

1902年に出版された『装飾資料集』には、これとよく似た扇がみられ、手持ち式で存在感のある装飾品であることがわかる（**拡大図**）。当時の社交場での女性の装いのなかで扇は欠かせないものであり、鏡がはめこまれたり、化粧品道具を入れ込むことができたりと趣向をこらしたものが人気を博していた。

この作品は装飾パネルやカレンダーなどにも多用されており、当館でもサイズの異なるものを2点所蔵している。ひとつには、フランス語で“Le vent qui passe emporte la jeunesse（通りすぎる風が若さを奪い去る）”と添えられていて、描かれた人物と風は時の流れの寓意と受け取れる。作品の中に詩的な言葉が入っているのも珍しい。

40歳を過ぎたミュシャをふとおそった感傷か、それともこの扇であおぐ風によせたユーモアかもしれない。デザイナーとして多忙を極めながらも、パリ万博を大きな転機として《スラヴ叙事詩》制作への決意が芽生えたこの時期、この言葉を添えたミュシャの心はどのようなものであったのだろうか。(Y.H.)



『装飾資料集』 PL.37

《アトリエ・ミュシャ》

1897年 紙に印刷 249×181mm
●テーマ展示「ミュシャの教室」に出品

モノクロでプリントされた本作は、ミュシャが自身のアトリエで行った講座「アトリエ・ミュシャ」の案内リーフレットである。本来はおそらく3枚組で、残りの2枚には曜日や授業料、授業内容などの受講案内の文章が記されていたようだ。講座は曜日によって内容が異なり、女性のためのクラスも設けられていた。背景には“COURS

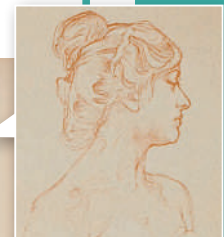


DE COMPOSITION D'ART DÉCORATIF（装飾芸術の構図のコース）”とあり、円形モチーフの前に女性像を配置したミュシャらしい構図は、その講座内容に相応しいものといえるだろう。さらに、ペンを持つ右腕と画用紙からなる開いたコンパスのような三角形など、直線的形態が効果的に用いられており、曲線的で優雅な雰囲気のミュシャ作品とは一線を画した、適度な緊張感やスマートさが感じられる。本作が「教育」というものを目的としているのがその所以かもしれない。

左から書かれた文字情報と呼応して、右方向へと視線を落とす女性。本作の後に出版された72枚からなるミュシャ・デザインの“教科書”『装飾資料集』を注意深くめくると、20ページの右上に、この女性を思わせる横顔の小さなデッサンを見つけることができる（**拡大図**）。「自然」そのものを根気よくデッサンすることを説いたミュシャは、『装飾』と題しながらも、デザインの完成形だけでなく、こうしたデッサンを敢えて多分に含ませている。このような自然主義的なデッサンが、彼のグラフィックデザインの源となり、さらに生徒たちの手本となっていたのだ。1890年代後半から1900年代初頭のミュシャの、画家・デザイナー・教育者としての顔を、本作から多面的に知ることができる。(M.T.)



『装飾資料集』 PL.20



ワークショップ 『ミュシャのオリジナルミニノート作り』

2020年9月12日(土) 13:00~15:30

講師/板倉正子氏(NPO法人書物の歴史と保存修復に関する研究会代表理事)

ミュシャの作品《桜草》と《羽根》を表紙にしたオリジナルミニノートを手作りするワークショップを開催しました。ワークショップでは和綴じ様式の一つ、「中三つ目綴じ」のノート作りに挑戦しました。綴じ部分が表紙で隠れる洋書とは異なり、和綴じは綴じた部分の糸が外から見え、本のデザインの一部になります。この綴じ糸を縫う作業も含め、参加者のみなさまは、一見シンプルな構造に見えつつも、意外と複雑な和綴じに挑戦し、和とミュシャを組み合わせたオリジナルノートを完成させました。またワークショップの前半では、江戸時代以降の日本の製本の歴史についても詳しく教えて頂きました。



講演会 『アルフォンス・ミュシャ：ベル・エポックの寵児』

2020年10月17日(土) 14:00~15:30

講師/千足伸行氏(広島県立美術館館長、成城大学名誉教授)

2020年、ミュシャの生誕160年を記念し、堺市が世界に誇るミュシャコレクションを余すところなく紹介した企画展「アルフォンス・ミュシャ 創作の軌跡」を開催しました。本展を記念し、ミュシャの研究で多くの実績を残されている千足先生にご講演頂きました。講演では、生まれ故郷チェコで過ごした時代やデザイナーとしてパリで活躍した時期、《スラヴ叙事詩》の制作に向かっていった晩年など、ミュシャの生涯を作品と共に振り返りました。またミュシャが過ごした19世紀末の華やかなパリの街の様子など、ミュシャが生きた当時の時代背景を、ミュシャや同時代の画家たちの作品を見ながらお話頂きました。さらにミュシャのデザイナーとしての特徴とその手腕について、そして理想の画家としてのあり方を探究した晩年にスポットを当ててお話頂くなど、ミュシャの画家としての多様な魅力を再発見できる貴重な機会となりました。



ワークショップ 『シャドウボックス作り』

2020年12月12日(土) 14:00~16:00

講師/瀬戸恵美子氏(ゆめの小箱 Dream Box代表)

厚紙に印刷されたミュシャのイラストをパーツごとに切り取って重ね、ミュシャの作品を立体的に再現するシャドウボックス作りのワークショップを開催しました。繊細な装飾が特徴のミュシャの作品パーツを切り抜き、ピンセットを使って接着剤で重ねていく作業は思いのほか難しく、根気のいる作業でした。しかし講師の先生方の助けを得て、参加者のみなさまはミュシャの《つた》と《月桂樹》を見事に立体的に蘇らせました。出来上がった作品は自立するのでそのまま置いて飾ったり、裏側にはフックも付いているので壁掛けも可能です。また額に入れることもできるので、参加者のみなさまは家に持ち帰ってどう飾るのか、楽しみにしておられました。



ワークショップ 『キッチンリトグラフ』

2021年1月9日(土) 14:00~16:00

講師/原田悠里(堺 アルフォンス・ミュシャ館 学芸員)

ミュシャ作品で多く使われている「リトグラフ」の技法を「キッチン」にある身近な材料を使って体験・制作しました。

ポスターや装飾パネル、パッケージなど、ミュシャのグラフィック作品では「リトグラフ」の技法は欠かせません。リトグラフはギリシャ語でリト(石)に描かれたグラフ(図)という意味。もとは1798年ドイツミュンヘンの劇作家アイロル・ゼネフェルダーによって発明された複製(印刷)技法ですが、その後版画芸術の表現のひとつになっていきます。本来リトグラフは、石灰石や製版液など特殊な材料と長時間の制作が必要ですが、「キッチンリトグラフ」では、アルミホイル、

オリーブオイル、コーラなど家庭にある身近なもので「リトグラフ」の仕組みを知ることができます。

当日は子どもから大人まで参加していただき、わきあいあいとした雰囲気でのワークショップとなりました。オイルや水加減、コーラのかけ具合でインクののり方が変わってくるので、版をつくるのが少し難しかったかもしれませんが、一度でうまくできた方も、何度か挑戦してうまくできた方もいましたが、参加者同士周りの方の方法なども参考にされたりしながら、各々楽しい作品ができあがりました!



！ サテライト展

堺市博物館「堺 アルフォンソ・ミュシャ館コレクション展」2020年7月14日(火)～10月4日(日) さかい利晶の杜「はじめてのミュシャ」2020年7月11日(土)～8月10日(月・祝)

ミュシャ生誕160年記念展に合わせて「堺市博物館」と「さかい利晶の杜」でサテライト展示を開催しました。堺市博物館では、当館コレクションの中から装飾パネル「四つの花」とともに、ミュシャ作品がモチーフになった工芸品の数々を、さかい利晶の杜では、「はじめてのミュシャ」と題してミュシャの代表的なポスター作品をレプリカでご紹介しました。会期中は3館をつなぐシャトルバスの運行も実施され、堺のまちをめぐるながら各館でミュシャと堺の文化にもふれていただけたのではないのでしょうか。



(上) 堺市博物館
(下) さかい利晶の杜

オンラインイベント

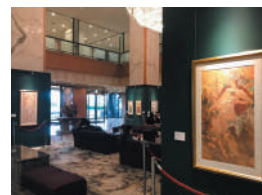
！ 「ミュシャ×自転車(OVE)人と自然に寄り添うデザイン」

新しい自転車文化を提唱する東京・南青山の「ライフクリエーションスペースOVE南青山」にて「ミュシャ×自転車-自然に寄り添うデザイン-」展(2020年9月18日～10月30日)が開催され、店舗内にミュシャのレプリカ作品が展示されました。これを記念し、10月10日(土)、OVEオンラインCafé(Facebookライブ配信)が開催されました。当館からは高原学芸員が《ウミロフ・ミラー》の前から中継し、「ミュシャと堺」「ミュシャと人」「ミュシャと自然」の3つの観点から、デザイナーとしてのミュシャについてお話ししました。



！ 「チェコフェスティバル in 関西2020」でのサテライト展示

2020年10月31日(土)・11月1日(日)にアゴーラ リージェンシー大阪堺にて開催された「チェコフェスティバル in 関西2020」に参加し、ホテルロビーにてサテライト展示を行いました。展示はフェスティバルに先行して10月24日(土)から実施しました。吹き抜けるロビーを、《四つの花》《四季》等の装飾パネルやチェコ時代のポスター等、レプリカ作品15点が彩りました。



！ ミュシャ・ノエルコンサート 2020年12月20日(日) ①13:00～②15:00～

Hot coffeeのみなさんによる木管5重奏の美しい調べとともにミュシャと作品のお話まじえながらのコンサート。ミュシャと同時代にバリで活躍したドビュッシー、20世紀のアメリカを代表するガーシュイン、スラヴ叙事詩へ向かうミュシャに響くスメタナの「モルダウ」や同じく同郷ドヴォルザークの「スラヴ舞曲」など企画展「ミュシャとアメリカ」の内容にも合わせて曲を演奏していただきました。コロナ禍で文化や芸術との出会いが難しくなっている時ですが、ノエルにホッと心あたたまるコンサートになりました。



！ オリジナルブックマークをリニューアルしました

リピーターの方を対象にプレゼントしている、当館オリジナルブックマークのデザインをリニューアルしました。『装飾資料集』『トリボリの姫君イルゼ』等のミュシャ作品から、花・女性・動物など、学芸員が厳選した8種類のデザインからお好きな絵柄をお選びいただけます。※ご来館の際はぜひアンケートにご協力ください。希望者に送付する次回展覧会の案内をご持参いただいたリピーターの方を対象にプレゼントをいたします。



！ 2021年オリジナルカレンダーのプレゼント企画

毎年恒例のオリジナルカレンダー(非売品)ですが、今回は次年度開催の企画展「カランドリエ ミュシャと12の月」展に合わせ、3か月毎・全4枚の豪華版として制作しました。それぞれに《四季》の春夏秋冬の女性像がデザインされています。2020年12月にはミュージアムショップで買い上げの方と、コンサートやワークショップにご参加の方に第1弾の配布を行いました。第2弾以降も引き続きプレゼントキャンペーンを実施予定なので、ぜひHPやFacebook、Twitterをチェックしてください。



！ Facebookがパワーアップ

コロナ禍による臨時休館などもあり、読み物として楽しんでいただける記事や動画を提供することに力を入れました。休館中は「おこもり美術館」シリーズとして、コレクション作品を紹介しました。連載企画「#ミュシャと365日」シリーズでは、ミュシャの誕生日や結婚記念日、サラ・ベルナルを讃える日、ゴーギャンの誕生日等について紹介しました。さらに、この連載は次年度開催の企画展「カランドリエ ミュシャと12の月」のもとになりました。



！ ミュシャ館公式Instagram開設!

8月より公式Instagramを開設しました! Instagramでは、ミュシャの細部にいたる描画や装飾性をご覧いただきたく、作品の一部をクローズアップしてご紹介しています。まだまだ試行錯誤中ですが、作品全体をとらえるだけでは気づかなかった細かな部分や、共通のモチーフなど違う視点でミュシャの魅力を知って楽しんでいただけたら、今後も更新していきますので、フォローしていただけると嬉しいです。



作品名	制作年	技法・材質	修復後寸法(タテ×ヨコ)	処置内容	委託先
《第8回ソコル祭》	1925年	リトグラフ、紙	1225×828	乾式除去、全体洗浄、裏打3層処置。マット紙台紙の新調、額交換など	山領絵画修復工房
《サランポー》	1897年	リトグラフ、水彩、紙	421×262	表面清掃、崩れ防止処置、中性紙ブックマット新調など	山領絵画修復工房
《百合の中の聖母(下絵)》	1904年	油彩、カンヴァス	764×562	表面洗浄、裏面洗浄、目立つ欠損の補彩、ドロアンの設置、作品固定改良など	森絵画保存修復工房

『主の祈り』— 芸術家としての理想、万人のための芸術を目指して—

「主の祈り」とは、聖書の中でキリストが模範として弟子たちに教えた祈りの言葉で、7つの祈りによって構成されている。ミュシャは7つの祈りそれぞれを、中世時代の写本のよきな飾り文字で表したページ(図1)、祈りをイメージとして表したページ(図2)、そして祈りをミュシャ自身の言葉で説明したページ(図3)として、3ページ1セットの計21ページとして描いた。ミュシャは本作を注文ではなく自主的に制作し、挿絵、装丁や文章など書籍全体の制作に携わった。ミュシャは当時、商業的なポスター制作の仕事に満足しておらず、「私の進むべき道は、どこか別の場所、もっと高い所にあるのではないかと、自身の芸術家としての立場に葛藤を抱いていた。この模案の中で、1つの回答として制作されたのが本作であった。ミュシャの息子シリによれば、ミュシャは本作を「精魂をこめた作品」と述べ、またポスター作品よりも『主の祈り』を評価してくれる人がいれば、ミュシャはその人のために何で引き受けただろうと推測しており、ミュシャが本作に対して特別な思い入れを抱いていたことが分かる。

19世紀末のフランスでは科学技術や産業が発展する一方で、物質主義に対する反感と暗い終末思想が芽生え、その先行きに漠然とした不安



図1

が感じられる時代でもあった。このような時代背景の中で、遠い過去の神話や伝説、人間の内面的な苦悩や夢想など、目に見えない世界に関心が寄せられ、文学や音楽、絵画などを通じて芸術家たちが表現しようとした。そして目に見えない世界を対象とするスピリチュアリズムや神智学、オカルトが流行した。ミュシャ自身もこの流れに関わっており、パリのヴァル・ド・グラース通りのミュシャのアトリエでは、神秘学やオカルト科学を学んでいたアルベール・ドロシャスらが、催眠状態のモデルに物語や音楽を聞かせてどのような反応をするのか観察する実験が行われた。その影響はやがてミュシャの作品にも表れ、モデルを思わせるような恍惚とし、思想にふける人物像が描かれた。またミュシャは既に亡くなった友人たちと交信し、メッセージを受け取ったと信じていたという。



図2

では、魔物たちの誘惑が取り巻く中で、前進しようとする人間の「意思」が目や閉じて立つ女性として表され、神の「気づかい(配慮)」を象徴する修道女のような衣装を着た人物像によって、悪魔に惑われないように導かれている様子が描かれている。そしてこの情景と共に、やがて人間が自由になり、生命を呼び起す神(至高存在)と向かい合えるようになることが文章で説明されている(図3)。このようにミュシャは、祈り文の意味、そして祈りの行き着く先と目的を、誰もが理解できるように、暗示的な装飾を施した祈り文、イメージ、文章によって丁寧に説明した。



図3

1890年代のフランスでは、「民衆のための芸術」という考え方が広まった時代であり、ミュシャも民衆に芸術を普及する目的で1894年に創設された「民衆芸術協会」に加盟し、協会のためにポスターも描いた。『主の祈り』は、ミュシャが目指すべき高みにある芸術家としての方向性、そして万人のための芸術という意味において、また神秘を探求する同時代の社会的背景においても合致した、描かれるべくして描かれた作品だったのではないだろうか。(Y.K.)

堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市立文化館)

- 観覧料 一般 510円 高校・大学生 310円 小・中学生 100円
*小学生未満・堺市にお住いの65歳以上・障がい者手帳をお持ちの方と介助者は無料
*20人以上は団体割引適用(事前に要問合せ) *その他各種提携割引制度あり
- 開館時間 9時30分—17時15分(入館は16時30分まで)
- 休館日 月曜日(休日の場合は開館)、休日の翌日(翌日が土・日・休日の場合は開館)
年末年始、展示替期間
- 交通 JR阪和線堺市駅下車徒歩約3分
JR快速にて・大阪から約25分・天王寺から約10分・和歌山から約60分・関西国際空港から約40分

590-0014 大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ベルマージュ堺式番館
TEL:072-222-5533 FAX:072-222-6833
https://mucha.sakai-bunshin.com 公式ウェブサイト

